

# ルポルタージュに憧れて

経済学部 竹下奈穂

先日、調べものをしてる最中に「他己紹介」という言葉に行き着いた。どうやら、自己紹介のモジリであるらしい。が、広辞苑には載っていない。他己紹介では、決められた時間内に相手に質問をし、いろいろな要素を引き出す作業をす

る。それを第三者に伝える。その人物がどんな人であるかを説明する。学生記者の仕事では、「今日は1時間ほどお話を伺います」などといった相手を拘束する。事前に得ていた小さな情報はあれども、本人に訊ねるまでの噂でしかない。まさに一見に如かず、である。



徳永英二教授の懇親会にて、先生と奥様と一緒に

インタビューではほとんどが初対面なので、その相手に自分のエピソードを語ってもらうのは大変だ。こちらの運び方如何で、相手の気分も機嫌も上下左右に大きくぶれるのを痛感してきた。私は2005年の『Hakumonちゅうおう』冬季号から関わらせていただいているが、取材は何度やっても楽

しくて、緊張する。

インタビューを行うとき、自分が原稿にしやすいように内容をメモする。これを取材メモと呼んできた。起稿する段になって、取材メモの「穴」というか、「ここを掘り下げて聞いておけばよかった!」と悔しく思う箇所が多々出てくる。すなわち、自分が投げかけた質問に偏りがあるということである。相手を伝えることを通して、一心不乱に自分を伝えてきたこの3年半。

学生記者に踏み出したのは、1年生の秋だった。NHKの朝のニュース『おはよう日本』で耳にした「新潟県立近代美術館では、中越地震被災者の手記を募集しています」との告知。書いてみよう。締め切り間際までかかりながら制限字数も確認しないまま夢中で仕上げた文章は、原稿用紙20枚分。それまで作文さえ母に泣きついていた私にとって、その衝動はかなりのものだった。自分でも、信じられなかった。

原稿用紙を手に向かったのは、「地球科学」の講義後の徳永英二教授のもと。当時講義で

地震を扱っていたこともあって、事情を説明し、読んでいただけないか、と伝えた。いま考えてみると忙しい先生に不躰なお願いをしたと思う。それでも、いやな顔ひとつせず受け取ってくれた。これが救いだった。後日「書きたいならこういうのがある」と学生記者の活動を先生から教えていただき、身一つで飛び込んだ経緯がある。

『Hakumonちゅうおう』編集室に入ると、当時指導をされていた田中紘太郎氏が大きな支えとなってくださった。このときの私の荒げずりの文章を、さらに削ぎ、鋭くしたのが、2005年冬季号に掲載の『オレンジ色の震撼』である。「体験談なのに客観的で、読ませる」と評価していたのには感激した。

掲載にあたっては、全力で書いた文章を自分で削っていかなければならなかった。どこも大切な部分なのに、と涙が止まらなかつたのを覚えている。しかし、田中さんの「骨にすることでもっと伝わる」との言葉を信じて、実現することができた。あの作業を完結させた経験は、確実に今の自分を形成している。

学生記者

ニュース

時は過ぎ、2009年1月20日。

経済学部で徳永英二教授の最終講義があった。7103教室には学生や先生方が多く足を運んだ。レジュメ配布などささやかなお手伝いをさせていただいたが、バイタリティ溢れる先生の魅力は会場中に満ちていた。徳永先生には自分の転機を見守っていただいた。お世話をしてもらったのではなく、選択肢を示していただいたことを本当に感謝している。最

## 出会いの積み重ねで大望目指す

うるさいな。やけに大きく聞こえる電車の音で、必然的に目が覚めた。寝惚け眼で窓を開け、首をひよっこりと出す。新居のすぐ裏に線路が通っていた。こんなに近かったのかと僅かに驚き、前日の引越当日には気付かなかったなと思ひ返し、また窓を閉める。

初めて引越した。自力で。正月に旧居に閉じ籠り、ただ黙々と段ボールに荷物を詰め続けた。友人のお母さんがくれたお節をつまんで、世間は正月なのかと独りごちた。あ

終講義で学生代表として

直接気持ちをお伝えする機会をいただけたことは、卒業を迎える私にとって大変嬉しいことだった。

指導者は伊藤博氏に替わり、自らのなかではまた新たな視点が育つものを感じている。学生記者としての活動は確かにここにあった。学ぶものが多すぎた、私の大学時代。

### 法学部 池田園子

まりの荷物の多さにうんざりしていただらした日もあったが、予定日に

## '09年春 最後の〈私〉

部屋を出ることが出来た。私はかなり都会へ越してきた。卒業、そして春からの就職へ向けて。

未だそのことについて、ぼんやりと思うだけだ。そっか、卒業だ。1年次で部活に入り、2年次で学生記者を始め、3年次から特にバイトに精を出し、冬の3ヶ月間就職活動をし、4年次でやたら旅に出た。簡単に言えば私の大学4年間は、そういうふうには毎年何かが増えていく感じだった。楽しかったと適当な言葉でまとめることが出来ない。いい意味で混沌としていて「何やってきたんだ、私」と笑い出したくなるような日々。

大学生生活における「財産」とでもいうべきものをナンバー付きしろと言われたら、学生記者は、ナンバー3以内に確実にランクインするであろう。偶然募集要項の紙を見つけた—それが締め切り直前だったので、すぐに課題作文を書いて編集

室へ走った—ことがきつかけだ。その頃から「何事も運と縁だ」と考えている。

幾度となく、普通は行かないようなところに取材へ行った。文章を書くことが好きだという理由で始め、一時マスコミ志望であったがよくよく考えて方向転換し、春からはIT企業で働く。ふらふらしているように見られる私(笑い)。

学生記者で、大事なことに気付くことが出来た。私は自分が好きな文章を書くのが好きだけ。趣味の小説執筆だとか。人間が大好き。知らない人と出会うことはとても楽しいわくわくする。人の辿ってきた道のりを聞くことは面白い。人と常に関わっていききたい。人に注目するくせがある。

10代の頃から公言している野望がある。作家になる。働きながら、1日に少しずつでもいいから、これからも書き続ける。若ければ若いほどいいけれど、30歳になって取つたつていいじゃないか、芥川賞。

社会に出て、これまで以上に面白い人にたくさん出会い、笑ったり怒ったり悲しんだり、たまに無茶な



ことをしたり、カッコいいこともカッコ悪いこともいっぱい経験して、そうして大人になっていく。私の中に出来てゆく過去の分厚い層。それをどんどん重みのあるものにしてい

き、目標を叶えたい。紛れもなく、大学生活もその中に堆積していて、それはずしんとしていて、抱えることが出来そうもない嬉しい重さなのだと思う。

## 取材相手から貰った宝物

法学部 山崎綾香

**大**学1年の夏。初めての取材で、パニック障害という病と闘いながら大学を卒業したOGに出会いました。

慣れない取材にたじろぐ私に、彼女は自分の闘ってきた病のことや在学中の人間関係の悩みなどを、赤裸々に話してくれました。彼女が新人記者の自分に心を開いてくれたことが嬉しくて、私は取材後も暫く興奮していたのを覚えています。

彼女は別れ際に「山崎さんが記者さんでよかった。自分に少し自信が持てました」という言葉をくれました。その言葉が嬉しくて、私は学生記者を4年間続けてきたと言っても過言ではありません。

◇ それから約60人に取材をしてきま

した。緑内障を抱えながら柔道で日本一に輝いた学生、ボランテアに懸命に打ち込む学生、箱根駅伝の選手やサポーター、NHKドラマの原作用を描いたOB：

彼らの努力や生き方を目で、耳で、肌で感じてきた4年間。心向き合わせ彼らの人生を知ること、私は大きな活力を得てきました。単なる取材を通り越して、出会った人たちが持つ「ストーリー」に私自身が励まされていたのです。

「自分も負けずに前へ進まなくちゃ」。原稿を書き終えると毎回そんな思いで胸がいっぱいでした。その瞬間が学生記者から貰った一番の宝物だと思っています。

◇



冒頭に書いたOGは、細井さんといえます。私の「学生記者」の原点でもある人です。先日、彼女に会いに下田まで行ってきました。4年前と同じ駅で待ち合わせ、4年前と同じ「邪宗門」という喫茶店で、そして同じ席で話をしました。アンティークな雰囲気漂う店内に、まるで4年前にタイムスリップしたよう

な錯覚を覚えました。

今春から広告会社に入社する今の私の悩みを、今度は細井さんが聞いてくれました。4年

前、細井さんが誰にも言えないような心の内を私に見せてくれたように、私も彼女に自分の悩みや弱い面を赤裸々にさらけ出していました。4年前とは立場が全く逆になりました。4年前ですが、彼女は丁寧に優しいアドバイスをくれました。

そして驚いたことに、細井さんは1年前に事務職から転職し現在は記者という職に就いていました。「人生ってどう変わるかわからないから面白い」。そんな彼女の言葉に、私はまた励まされました。

◇

学生記者

ニュース

伊豆急下田からの帰り道。踊り子号の窓から河津桜が見えました。夕暮れどきの空を背景に、桜が輝きながらこちらを向いていました。

一足早い春を感じるとともに、今春からの自分に期待を持たれた私がいました。

## 「在学生を元気にしたい」の一念で

法学部 池内真由

入学式の時に配られた、重たい紙袋の中に「Hakumonちゅうおう（以下ハクモン）」は入っていました。当時、中央大学に入るのがちよつと不本意だった私は、期待と憂鬱が入り混じる微妙な心境で「ハクモン」に出会いました。「ハクモン」は、私が大学に入って一番初めに所属した団体であり、あれから4年が経った今、卒業よりも後に、最後の記事を書いています。私にとって大学生活は、始まりも、終わりも「Hakumonちゅうおう」でした。

「上手くいけばコネとか作れるかもよ〜」なんて友人と目をキラキラさせて入ってみると、コネは出来ませんでした（笑）。たくさんのお出合いがありました。取材者はざつと数えるだけでも60人。思い出に残っている企画も数え切れないほど

あります。

初めての取材は、「LOVE JUNK」に所属していた理工学部院生(当時の甚内良太さん。インストラクターとしてダウン症の子どもたちにダンスを教えていた彼のレッスンでは、体育館がバンバン振動するほど、エネルギーギッシュに踊る子どもたちの笑顔が印象的でした(youtubeでレッスンの様子が見られます)。

その時の取材の面白さから弾みがついて、私も学生記者として次々と企画を立てました。映画「オペレッタ狸御殿」のオープニングを飾った書道会、自民党が大勝し、「小泉チルドレン」を多く生んだ衆議院総選挙に関わった学生たちの座談会、食いしん坊企画(!?)の学食取材、一人暮らしの奮闘ぶりを取材した「一人暮らしのバラード」、そして学ぶこと

## '09年春 最後の〈私〉

の多かった戦争モノの取材などなど。4年次にはついに紙面から飛び出し、容貌障害と闘った藤井輝明氏の講演会を企画しました。これは、広報誌の作り手である学生記者と読者が双方向に参加できた、待望の企画でした。

自分が企画したものの以外でも、印象に残っているものが3つあります。北方謙三氏のインタビュー、中大生なら誰もが取材したくなってしまおうであろう箱根駅伝、北京オリンピックに出場した福澤達哉さんの取材。特に北方謙三さんは、机に置かれた執筆中の原稿、キャップが外れた状態の万年筆を見ただけで作家の持つ貫禄に圧倒されました。葉巻を燻らせて、「最後に質問したいことは」なんて聞かれたときには、頭は真っ白でしたが心は熱くなりました…。



様々な企画や取材を通して気づいたことがあります。それは、在学生に中大コンプレックスを持っている人が予想以上に多いこと。大学受験からの人もいれば、就職活動を通して感じる人もいます。

しかし、私が取材で会った人びとは、みな自分に信頼を置いていて、

自信に満ち溢れていました。そのことに気づいてからは、「大学広報誌」というからには在学生を元気にしたい！」、その思いで突っ走ってきました。紙面を通して、1人でも「自分もこうなりたい」と思ってくださる記事を書けていけば、これ以上嬉しいことはありません。

## 何だっって挑戦！やりきった学生生活

法学部 八並恵理子

サークル2つ、インターンシップ2つ、アルバイト、ゼミ、炎の塔、南米旅行・・・私の学生生活は本当に多忙だった。学生の身分である授業が危ぶまれるほど、毎日びっしりと埋まっていたスケジュール。4年間で卒業できたのが奇跡と

思えるほどである。

4年前、中央大学に入学した私には決めていたことがひとつあった。それは「興味を持ったことは何でも挑戦しよう」ということだった。大学に入ってみたいもの、特別に将来やりたいことがあるわけではなかったし、自分が何に向いているのかも分からなかった。そこで

春からは、出版社に勤務します。

媒体を変えても、人に情報以上のものを伝える、心を動かすものを作っているよう精進したいと思います。今までお世話になった取材対象者の皆さま、入学企画課の皆さま、そして編集長に心から御礼申し上げます。

になっていった。

その中のひとつが「Hakumonちゅうおう」学生記者としての活動だった。文章を書くというのは想像以上に難しいことだった。読むのと書くのでは大違いである。自分の表現したいことを文章に落とし込むこと、インタビュ相手と心を開いてもらうこと、始めは四苦八苦だったが、次第に慣れていった。

そしてもうひとつ「Hakumonちゅうおう」がくれたものがある。それは「出会い」である。大学1年生の時、やる気応援イベント「政治の世界で“働く”という選択」

を取材した（05年夏季号「ニュースplus」）。そのイベントは、実際に政治の世界で働く人の話を聞き、政治を考えようという企画で、国会議員・市議会議員・そして政治家

秘書として働く現役中大生らがそれぞれ舞台上で自分の体験を話すものだった。

そこで私は現役の大学生でありながら、政治家秘書として働いているという女性に興味をもった。結局、その場で直接彼女と話すことはなかったが、それがきっかけで私はその夏に議員インターンシップに申込み、大学2年生の時に政治家秘書をすることになったのである。

きっかけとなった彼女とは、その後偶然にも同じ議員のもとで働くことになってから再会した。「あなたがあんなに驚いていた。初めの一步を踏み出してみると、次への扉は自然に開いていくものである。」

もちろん多くのことに手を出した分、疎かになった部分もある。それは反省すべきことでもあるし、心残りでもある。しかし、興味を持ったことに全力で挑戦していくうちに、大学入学当初より自分のことがよく分かるようになった気がする。今春からは波乱の不動産会社で街づくりを担うこととなる。何の後悔もない、そう言い切れる学生生活だった。

